

追記

一、伐採のノルマ満たさず 寒夜果て

息絶えなむと凍土に臥せり

一、ハバロスク ララ アムールとロずさみ

虜囚の苦役忘れしがごと

一、バイカルに堪えたる漢の蘇武のごと

雁の渡るに涙せし寒夜

一、マンドリン構えしソ兵 羊追ふ

ごとくに叫び ビストリ ダワイ

一、シベリアの飢えと酷寒忘れしか

ハミングするはアムール小唄

一、囚はれて苦役に泣きしかの国へ

誘ふパンフ シベリア紀行

抑留記

熊本県 霍田 功

私は、大正十（一九二二）年二月十八日、現在地にて長男として出生。昭和八（一九三三）年、旧東砥用村立豊富小学校卒業。昭和十一年三月三十一日、砥用村立高等小学校卒業。二年間。卒業後は父が会社員でしたので、農家の仕事をせねばならなかった。家族が多く、父母、弟が三人、妹が三人で大家族でした。次男は昭和十七年一月四日、フィリピン沖で戦死でした。私は兵役で昭和十七年一月十日、熊本西部二十一部隊野砲隊に入隊致しました。野砲隊で三カ月教育されました。

昭和十七年四月一日、門司より釜山經由で満州国境守備隊五地区七〇〇部隊に入隊。山口隊はハイラルで、四月というのにまだ雪が降っていました。隊にはノモンハン戦に行かれた人が数人おら

れて、とても厳しかったです。

一期の検閲後、病馬廠に行きました。三カ月で隊に帰って来てからは隊の仕事でした。

昭和十九年三月頃だったと思います。満州チハルに分遣されて関東軍の保守馬廠に分遣されました。ここは各兵科から来ていました。

保守馬廠では、中国の新郷と北京に二回、満馬を連れて行きました。釜山には馬を取りに行きました。

中国に行った時はシラミをもらって、帰りの汽車ではシラミ取りが仕事でした。四回目に満州の孫呉にある百五十人の野砲隊に行きました。隊に着いたとたん、ソ連機が飛んで来ました。そこで百五十人の人は二十人ぐらい、各中隊に分かれてしまいました。

隊に行ったのは二十年八月四日だったと思います。私は二大隊本部に行きました。孫呉の山に登って戦争体制となりました。

私の居所は本部から一キロメートルぐらい離れ

た所でした。山の上では中国産の大砲でしたが、七〇〇部隊にいた時と同じ七五ミリの大砲でした。分隊にいた人も兵科が違うので大砲の事は知らない人が多かった。野砲出の人は自分と初年兵の二人しかいませんでした。山の上からソ連機の来るのを見守っているばかりで、大砲は一発も撃たずに終わりました。山の上より爆撃を見守っていました。

八月十五日、昼食を取りに行った人が「戦争は負けた」と言ってきたが、半信半疑でした。ところが夕方になり、歩兵隊の人が連隊旗を燃やされたので本当ではないかと思っていたところ、本部より本隊に集合という事で、初めて本営だと思えました。大砲の弾はたくさんあったので地下に埋めてしまつて本隊に行きました。夜十時頃だったと思います。小雨が少し降っていました。私は一頭の馬に乗って一頭は引いて、二頭持つて山より降りました。その時は小雨で、時には弾の音がして、とても気持ちが悪かったです。夜が明け

て見れば、誰も剣は持っていないかった。戦友と二人で枯れ草の中に剣はさし込んで隊内に行きました。「武装解除」という事を聞いていなかったためでした。

兵舎に着いてから毎日、食料を見つけないで行って見ました。時にはソ軍兵が、何かいい品物はないかと見つけに来ていました。毎日食料を見つけないのが日課のようでした。

九月七日頃、隊を作って北方に行軍で行くようになりしました。持てる物は何でも馬車に乗せて行軍が始まりました。二日経った所で汽車に乗せられて国境のブラゴエに着きました。行軍にて広い農場に着きました。国境を渡ったのは九月九日だったと思います。船で国境を渡ったのは一大隊一千人と言われていました。入ソは四番目とか聞いていました。農場に着いてからはじやがいも掘りでした。二十人ばかりの人にスコップ二本しか与えず、後は手で掘らなければならなかったのです。一日に一人で一畝ずつでしたが、一畝が四百五十

メートルあったそうです。こちらからは見えないくらいでした。私は三日間でした。四日目から自動車にじやがいもを乗せる仕事に回りました。車が来なければ仕事がないのでとても楽でした。

農場の方は十日ぐらいで、それから山の方に連れて行かれました。山には隊全部でした。山に入ってから伐採が仕事でした。山の中ですので何もありませんでした。土を少しはねて、その中に軍隊の時の携帯の天幕を、小さい物でしたが、それを合わせて張り、毛布を上下していました。仕事に行つた帰りには、直径十五センチの松の木の直材をわずらで引いたり担いだりして帰って来ていました。自分たちが入る所を造らなければならなかったのです。山の斜面を二メートルくらい掘り出して、その中に五メートルの長さで、幅は三十メートルありました。持って来た松の丸太を重ねて積み上げて壁なり柱なりにして、外を土で覆ってしまつて、二、三カ所窓を少し開けて洞窟みたいな家を造りました。でき上がったのは十一月

の末でした。十一月と言えば気温も零下に下がっていました。天幕の中では霜が降りていました。十二月になってようやく家に入る事ができました。中は暗くて見えないので、作業中に松の肥えているところを取って来て、それを燃やして明かりにしてみました。松の煤が出るので、家の中は煤でいっぱいです。後では燃やすのを少しにしたが、朝起きて痰を吐くと黒い痰でした。鼻をかんでみると、これも黒くなっていました。そうした生活をしていました。

食事は、正月前になって粉が来ましたので、臼と杵を作って、搗ついて炊いて食事していました。が、糲粟はとも喉を通らなかったので返して小豆と換えてもらいました。そうした生活をしていましたところ、病気が出ました。隊で隠舎カクシヤを造ってそれに入れたり病院に送ったりしました、百五十人くらい病にかかりました。私も病人の手伝いをしていましたところ病にかかり、隠舎に行きましたが、わずか九日で小隊に戻りました。小隊の仕事

をしていたところ、炊事に回されました。炊事当番は五人でした。当番を一カ月していたところ、軍の方より来て、体の弱い者は西の方に連れて行って休養という事でした。私もその方になり、汽車に乗せられてウラルを越えて、チカロフという町に連れて行かれました。チカロフでは休養どころではなく、すぐに建築作業でした。私は一週間したところで百人とレンガ工場と石炭工場のあるところに行きました。私はレンガ工場でした。とても大きな工場で、日本では見た事のない大きなものでした。年がら年中火の消えない大きな工場でした。私たちが行く前にはドイツの抑留者がいたと聞いています、入れ替えのようでした。

レンガの土取りから始まり、ようかんのように出てくるのを切ってそれを乾燥させて、それを釜に入れて二階から石炭を入れて燃やしていくのです。釜の入り口が三十カ所くらいあったようです。その入り口より一万个の数を入れたり出したりするのが私の仕事でした。時にはまだ熱いのがある

時もありました。一輪車で出し入れしていましたが、下に鉄板を敷いて、その上を通して行っていました。この仕事は現地の人が一人と日本人が二人でした。千葉の詞合君と後で女性が一人来ましたので、四人で出し入れをしていました。その女性の人はドイツ系の高給取りの人で働き者でした。工場では言葉は慣れて何でも話せるようになっていました。工場のカマンジル（責任者）に気に入られていたのでとても良かったのです。釜の事は大抵任されていた。レンガをトラックで買いに来られる人が毎日のようでした。私たちに車に乗せてくれと言って金をくれたり、パンをくれたりしていました。工場では金は要らないし、金を持っていても仕方がないので、現地の人が金貸してと言うと金を出してやっています。工場の残り火でじゃがいもやらかぼちやを炊いていました。後で朝鮮人の人が二十数人来ました。朝鮮の人とは仕事がかわなかったです。

毎日同じ仕事を現地人と一緒にしていたころ、

物をもらうのを覚えて町に出て行くようになりました。町まで三十分ぐらいで行っていました。ところが悪い事に門より出て行ったところをソ軍の監視人に見つかり注意されました。カマンジルが断るけれども聞かず、本隊に連れ戻されました。本隊で仕事をしていたところ、二十日頃にはレンガ工場に二十人行くようになり、私もそれに入り、又工場に来ました。工場でも本隊でも、身体の悪い人から帰国の人選がありました。後に残され残されして、最後まで工場におりました。レンガ工場では私はカマンジルに気に入られていたもので余り苦しみはありませんでした。そうした事を毎日しているうちに月日がたちました。

帰国の話が出てきたのは昭和二十三年の九月でした。このレンガ工場では現地人と一緒に仕事をしていた関係上、人はどこの人も同じという事が頭にありましたので、私たち抑留者としてはとても良かったようです。この点、日本人はいま少し見習わなければならないと思ったことでした。チ

カロフの本隊では十個目の家を造り始めて帰ってきました。チカロフを後にして、十月の初めだったと思います、汽車に乗ってノボシビルスクとイルクーツクとチタで風呂に三回入りました。ナホトカまで二十三日かかって着きました。ナホトカでは日本人が山のようにした。最後の船が昨日出たという時でした。日本人が五万とか聞きました。

ナホトカでは共産運動ばかりでした。ナホトカに十日間いて、春にならなければ船が出ないとの事でした。それから又シベリアの山に連れて行かれました。春になったら一番に帰すとの事で山の方に汽車にて行きました。

今度はシベリアでは何でも仕事をさせられました。ナホトカでの共産運動はとても大変でした。シベリアの方ではそれはあまりありませんでしたが、仕事がくるくる変わりました。伐採の仕事、雪の中で材木の切り出しと、トラックへの積み込みなど、いろいろな仕事が変わって春を待っていました。四月になっても何の事もなく、五月、六月

となっても何もなく、製材所の仕事が夜の十二時交代で十二時間の仕事でした。これが一番辛かったです。帯のこが三本も立っていました。直径一メートルぐらいの松の丸太も一回で四つに引いてしまいます。とても大きな工場でした。トロッコで着いたものを運ぶ仕事が一番しんどかったです。一カ月あまりでしたので、工場の木材の整理をしぱらくしました。その時丸太が転がって下になろうとしました。足の甲と松の節とで止まり、一回回ったら下になってしまうところでした。丸太は直径が六十センチぐらいありました。その時下になっていけば今日の私はいなかったでしょう。シベリアでは材木が多かったです。二メートルに切つて一メートル十センチに積み上げる仕事は二人の一日の仕事でした。雪の中の仕事でした。二メートルの木を今度はトラックに乗せる仕事もしましたが、これは車が来なければ仕事にならないかったです。夏になって七月頃だったと思います。帰国の話もありましたが実現はしなかったで

す。ちょっとした畑のあるところに行ったところ三人の人がおられるので、ロシア言葉で挨拶をしましたところが、日本語で「今日は」と返事がきました。変に思いい話をしたらトラクターの運転手の人ばかりでした。その人たちは市民権を取って帰化しておられた方ばかりでした。今日、あの人たちは日本に帰って来ておられるだろうかと思うものです。シベリアの地をあちこちしていたところ、やがて一年が来るようになってきました。

十月の初め頃になってようやく帰国の話があつてナホトカに行くようになり、シベリアからですので昨年のようにありません、二日間ぐらいでナホトカに着きました。ナホトカには今年もたくさんの方が集まっています。乗船の手続きをして船に乗るようにして、十月二十八日乗船して、舞鶴に着いたのは三十日でしたが、一個中隊が少し騒いだので上陸ができず、一夜舞鶴港にいました。三十一日上陸して、舞鶴にてそれぞれの手続きをして、身体を消毒をして現金も三千円もらい

ました。ちょっとひまができたので熊本の掲示所に行ってみましたが、中村の西谷さんの写真はありましたが自分のはありませんでした。家の方が発電所のそばですので、家もあるだろうかと思いましたが。熊本市内が焼けてしまっている写真ばかり掲げてありましたので、熊本行き汽車に乗って帰りの途につきました。下関にて戦友の小池君が誰か知っている人がいないかと言って汽車に乗り込んで来ました。小池君は士官になって内地に来ていたそうでした。引揚げの車には一般の人は乗る事はできないと言ってこられたので、すぐに他の所に連れて行かれました。ようやく熊本駅に着いたのは十一月四日、午後三時半頃だったと思います。

駅にて私が出て来るところと、迎えに来ていたところが違っていました。迎えが来ているものと思ったが見つけられずにいたところ、知り合いの後藤一利君に会いました。一利君も満州ハイラルに行っていました。今夜は一利君の所に泊まって

明日帰ろうかと言っていたところ、弟たちと会って南熊本まで行き、砥用行き汽車に乗って帰りました。家にはたくさんの方が迎えに来ていました。

昭和二十四年十一月四日の夕方でした。七年十カ月で家に着きました。

私こと、無学の上、脳卒中後の事で、文がよく書けないところがたくさんあるかと思いますが、何とぞその点はご了承下さい。

無 題

埼玉県 山口 秀夫

私は、昭和十九（一九四四）年の春に補充兵として召集されました。第三乙種、第二補充ということで、本当に貧弱な体だったものですから、軍隊に行くなんていうことは全然夢にも思っていなかったんですが、それが突然召集令状が来まして軍隊へ行かなきゃならない。それが工兵という、土方ですね。穴を掘ったり重いものを持ったり、そういう兵種の工兵という隊に入隊させられました。

その召集令状が来たときに、私は当時大連に住んでおりました、大連の兵事部に召集令状を持って行ったんですが、その兵事部に担当の准尉がおりました、あなたたちは教育召集だから三カ月軍隊で辛抱してこい、三カ月すれば帰れるからということで、それならしようがないなと思って軍隊